Living Locally Reconsidering Critical Regionalism
アトリエ・ワン+福祉楽団
乾久美子+東京藝術大学乾久美子研究室
Eureka
木暮伸也
木村崇人
小林エリカ
ツバメアーキテクツ
照屋勇賢
藤野高志/生物建築舎
藤本壮介
水谷俊博建築設計事務所
三田村光土里
山極満博
ライゾマティクス リサーチ

地 **_** 域 社 2 会への ま ١٢ な ざし 棲 **t**



彰国社





ごあいさつ

私たちが暮らす街や家は、社会の変化を反映しながら時代ごとに姿を変え ています。現代の日本は、物質的/経済的豊かさとは異なる価値観を人々 が大切に考えはじめ、地域社会を見直す転換期を迎えています。自然との 共生、脱成長型経済、高齢化の進展や家族のあり方の変容が目の前の差 し迫った問題として、個人の生き方に大きな影響を与えていると言えるでしょう。 建築デザインの領域においては、コミュニティとの関わりや協働が重視され、 理念や美意識を中心に据えた建築デザインとは異なる傾向が求められはじめ ています。また、アートの領域では地域性や個人の違いの多様性を肯定し ていく表現が注目され、もっとも個人的と言える記憶や身体感覚、そして境 界によって隔てられたもの同士の関係をつくり上げることに大きな関心が寄せ られています。

本書でご紹介するのは、地域社会に棲むことへ目を向ける14組の建築 家やアーティストの実践です。それらを通して、私たちがこれからどう棲むべき なのかを考えるうえで大切なメッセージを受け取っていただければ幸いです。 なお、本書はアーツ前橋における「ここに棲む一地域社会へのまなざし」 展に際して刊行されました。同展の開催にご協力をいただいた多くの方々に 深く感謝申し上げます。

> 2015年10月 アーツ前橋館長 住友文彦

Greeting

The houses and towns that we live in reflect social change just as they themselves are subject to change with each successive era. In Japan today, people have begun to place greater importance on values other than material and economic wealth, ushering in a traditional phase marked by a reevaluation of regional society. Imminent problems such as coexisting with nature, the degrowth economy, the graying of society, and changes in the family structure are also exerting an influence of individual lifestyles.

In the field of architectural design, there is a strong emphasis on connecting and cooperating with the community, and there is also an emerging desire for approaches that differ from traditional design strategies rooted in ideas and aesthetics. In the field of art too, work that affirms local characteristics and a diversity range of individuals is attracting attention, and there is also a great deal of interest in exceedingly personal areas such as memory and physical sensations, and creating links between those who are separated by various boundaries.

In this book, we introduce the practices of 14 groups of architects and artists who focus on living in regional society. It is our hope that through their work readers will discover important messages related to how we might live in the future.

The book is being published in conjunction with an exhibition titled *Living Locally: Reconsidering Critical Regionalism*. We would like to express our heartfelt gratitude to all of the countless people who helped us realize this exhibition.

SUMITOMO Fumihiko Director, Arts Maebashi October 2015

Living Locally: Reconsidering Critical Regionalism

First Published in Japan on October 30, 2015 by Shokokusha Publishing Co., Ltd. 8-21 Tomihisa-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 162-0067 Japan Tel +81 3 3359 3231 http://www.shokokusha.co.jp

Supervising: ARTS MAEBASHI Publisher: Masanori Shimoide Printing and Binding: Shinano Publishing Press Co., Ltd.

© ARTS MAEBASHI 2015 ISBN 978-4-395-32051-6 C3070

Any unauthorized duplication (copying), reproduction, or recording to magnetic, optical, or other media of the content of this book, whether in whole or in part, is strictly prohibited. Please contact the publisher for authorization.

凡例

本書はアーツ前橋で開催された展覧会
 「ここに棲む一地域社会へのまなざし」の図録として刊行した。
 出展者名の五十音順に掲載した。
 作品図版に添えたデータは下記のとおりとした。
 建築作品:作品タイトル、竣工年、所在地
 美術作品:作品タイトル、竣工年、所在地
 美術作品:作品タイトル、制作年、展覧会、
 開催年、開催都市/国、技法・材質、
 寸法(縦×横×奥行き、映像の場合は尺)、協力者の順に記した。
 ただし、作品によって記載していない項目もある。
 作品名は《》、プロジェクト名は〈〉、
 シリーズ名及び展覧会名は「」とした。

Contents

- 2 ごあいさつ Greeting
- 6 ここに棲むための想像力 住友文彦 Imagination for Inhabitation SUMITOMO Fumihiko
- 16 ケンチク(Kenchiku)と 批判的地域主義 (Critical Regionalism) に関する覚書 渡辺真理 Notes on *Kenchiku* and Critical Regionalism
 - WATANABE Shin Makoto
- 28 アトリエ・ワン+福祉楽団 Atelier Bow-Wow+Fukushi Gakudan
- 34
 乾久美子+東京藝術大学乾久美子研究室

 INUI Kumiko+Tokyo University of the Arts Inui Lab

40 Eureka

- 46 木暮伸也 KIGURE Shinya
- 52 木村崇人 KIMURA Takahito
- 58 小林エリカ KOBAYASHI Erika
- 64 ツバメアーキテクツ Tsubame Architects
- 70 照屋勇賢 TERUYA Yuken

- 76
 藤野高志/生物建築舎

 FUJINO Takashi/Ikimono Architects
- <u>82</u> 藤本壮介 Sou Fujimoto
- 88 水谷俊博建築設計事務所 Toshihiro Mizutani Architects
- 94 三田村光土里 MITAMURA Midori
- 100 山極満博 YAMAGIWA Mitsuhiro
- 106 ライゾマティクス リサーチ Rhizomatiks Research
- 112 座談会 ここに棲む根拠はどこにある? ツバメアーキテクツ×三田村光土里×藤原徹平
- 120
 「ここに棲む」ためのブックガイド 波辺真理・藤原徹平・住友文彦
- 122 作家略歴 Artist Profiles
- 132展覧会概要Exhibit Information
- 133 謝辞 Acknowledgements
- 134 写真クレジット Photo Credits

ここに棲むための想像力

住友文彦

もし、ビルに囲まれた大都市の中心地ではない場 所にあなたが住んでいれば、自分が住んでいる場所に は、かつて誰が住んでいたのか、あるいはどのような 自然や地形があったのか、ときっと考えたことがあるだ ろう。自分がどのような住まい方をしているのかについ て考えるとき、家族や仕事という身近な事情が必然的 な要因になっていると感じている人はおそらく多い。 想像してみてもいいはずである。それは私たちの牛の 営みを、自然との関係や死者の記憶など循環的な時 間の流れと分かちがたく結びついているとみなすことに なる。こうしたことを想像する力が、近代国家や科学 / 教育のシステム、そして資本主義経済における労 働によって現代の日常生活からは少しずつ除外されつ つあると言えないだろうか。

見つめた小説のひとつに、アメリカのノーベル文学賞 作家パール・S.バックの『つなみ』 (1947年) という 小さな美しい作品がある。彼女は、日本の海辺に住 んだことがあり、その経験から津波で家族を失った少 年の物語を書いている。その最後の場面で、少年が 悲しみや恐怖を克服した証として新しい家に海側を向 いた窓を作った、と書かれている箇所を、かつて私は 合理主義として批判したことがある¹。その漁村の家に 人間の象徴のように登場し、自然への畏怖が薄まっ ているように感じたからだ。 おそらく長年かけて自然と 共存して生きてきた人々には、その両方を分かちがた く受け止める感性が根付いているはずである。

震災と建築/芸術

家の窓をどこに作るかによっても、地域と私たちの そして、その論争の直後、1923年に起きた関東大

関係が見出せる。現在の私たちが、どのように住む べきかを考えるうえで自然災害、とりわけ近年のふた つの大震災の影響を抜きに語ることはもはやできない。 2011年3月11日、アーツ前橋の実施設計のため に現地調査を行っている最中に私は経験のない大き な揺れに襲われた。その後、新しい美術館を準備す る年月は電力制限や福島第一原発の事故を経験す しかし、そこにもっと大きな偶発性が潜在しているところことや、芸術は社会においてどのような役割を担う のかを問い続ける時間と重なっていた。そのため、こ の美術館がかつて商業施設だったときの建物のかた ちを留めることは、訪れる人に過去と現在をつなぐ時 間の連続性を感じ取ってもらえるという点で、とても大 きな意味を持っている。設計者の水谷俊博(88頁) は、地域の人々が見慣れた外観を大きく変えることな く、むしろ外側に広がる街の空間と類似する知覚経 日本の自然観や死生観を来訪者の視点から丁寧に 験を内部に持ち込むというコンセプトによって建物を生 まれ変わらせた。さらに、私たちが発見したのは、ほ とんど人の目に留まることがない北側の大きな非常階 段だった。その当時、前橋で滞在制作を行っていた 照屋勇賢(70頁)は、ひとりの芸術家としてできるこ とがあるのかを自問する日々を送っていた。そのなかで、 この非常階段をガラス越しにいつも見えるようにして日 常と非常時を連続させ、さらに彼が震災後の3月27 日に聴いた群馬交響楽団のチャリティコンサートの音 はどこにも海を向いている窓がなかったが、新しい窓 源が毎日午後2時と4時に再生される空間をつくる提 は成長した少年が自然を統治する知恵と勇気を持つ 案をした。それは、「非常時の芸術/美術館の非常 時の役割 | を言葉と絵によって表現した冊子を伴って、 多くの家屋や建物、そして街までを破壊した震災は、 それらを作る仕事に携わる建築家たちにも大きな問い を突き付けたであろう。私たちが生きる空間がどのよう なものであるべきか、そこには技術と感性の双方がせ

開館時に美術館の展示室の一部となり実現した。 めぎ合う。偶然にもここ前橋には、20世紀初頭に建 築は芸術であるかをめぐって論争を繰り広げた野田俊 彦と中村鎮のふたりが設計した建物が現存している2。 震災に先立つ1920年に「分離派建築会」が開催さ

れ、そこでも若き建築家たちによって建築は芸術であ ると強い主張がなされている。なぜ、そのようなことが 必要だったのか。彼らが学んでいた東京帝国大学建 築学科の教授だった佐野利器が1915年に地震の 揺れを定量的に測定し耐震構造学の重要性を示し、 飾社はそれを表面上に表現するものであると反論する。 住宅や都市計画において技術主導の解決が注目を集 めていたことに彼らは反発したのだった。そして、マグ ニチュード7.9の揺れによる家屋の崩壊と火事によっ を追い続ける今の姿勢は「日本の民家」研究や「考 て東京は荒野になった。生き残った人々がそこで住ま いや商売のために建てた一時的な構造物を、低価格 で装飾する仕事を請け負うバラック装飾社の活動に着 手していた今和次郎は、前年に「日本の民家」という な分類にまとめることなしに、ひたすら記述していく。 研究をまとめた早稲田大学建築科の助教授だった。 対象に寄り添い、更新されることで増殖していくような それに対して、先の分離派建築会の滝沢真弓は批判 を突き付ける。建築を芸術とみなすうえでは装飾を剝 ぎ取るべきであるとし、そして主体としての建築家の役 割を強く求めた。倉数茂は、国家や宗教など父権的 な求心性に依拠した安定した象徴秩序と切り離され、 物のように変化していく街とそこを行き交う人々を観察 都市部を中心に大衆が個人の自由な欲望を表出させ はじめる時代――それは現代まで続く近代以降の社 会に共通するものである――に、分離派が主観によ る自由な表現を求めた理由を、権力による管理に対し て単一の主体を編み上げていく技術が必要とされてい まるときに空間が本来の目的と異なる使われ方をする たと分析している。そして、さらにそれは「実は匿名の 合理性、権力による管理と相補的であるしという指摘 をしている。現代の私たちもまた内面と行動を「自分 らしさ」という単一性に向けて編み上げるべきと考えて いるが、それは同時に政治や資本の要求でもあり、そ して芸術における個性という考えも類似のものになりえ 人の感情の働きにかたちを与えるようなものと言えない る。つまり、私たちの牛が近代の画一化から逃れるに は、それを揺るがす感性に棲むことの可能性を見出し、 部を見出すうえで、写真というメディアも有効な手段に 「建築」や「芸術」に対してすでに付与された単一性 を拭い去る必要がある。

細部へのまなざし

もう一度、先の論争の応酬を見てみよう。滝沢の 指摘に対して、今和次郎は人々の生活のなかで感じ ているものや欲求しているものを肯定し、バラック装 それ以上の、普遍的な美を建築のかたちに求めること なく、あくまでも表層に現れる人々の生活とその変化 現学|研究においても貫かれている。彼の「考現学| は、本格的な消費社会が到来し、街を闊歩する人々 の行動や身なりを逐一記録する。その記録を固定的 運動だった。おそらく「考現学」の魅力とは、こうして 雑多で豊かな細部が排除されず、しかも単一のもの に回収されないまま眼にすることができる点にある。

このフィールドワーク的な観察によって、まるで生き する眼は、乾久美子(34頁)が実践している作業に も共通している。ただ乾の視線が見つめるのは、今 が路上の個人を観察していたのに対して、あくまでも 空間に生じているかたちである。さまざまな人々が集 数々の例を採集し、そこに新しい建築の言語を見出そ うとしている。自治体や企業や商店がそれぞれの目的 によって形づくる街のかたちに対して、個人が自由に 他の人と出会い、対話するような空間的条件を見つ け出すことは、まだ管理や消費の対象となっていない だろうか。また、同じようにまなざしが届いていない細 なり得る。かつて白川昌生の「場所・群馬」という活 動にも参加していた木暮伸也(46頁)は、生まれ故 郷でもある前橋で田んぼの水面に反射する郊外の住 宅を撮影している。また、「parallax」シリーズでは

普段見過ごしている些細な物や細部がガラスや光の 集合住宅《Dragon Court Village》(2013年) 作している。

の強い自我と同時に大衆文化も勃興している。大衆 文化として人々の移ろいやすい心の揺らぎをうまく表現 した漫画やアニメは、女性や子供の内面や、反社会 的な存在やマイノリティといった主要なメディアでは描 かれることが少なかった対象を表現している。藤野高 志 (76頁) は 《天神山のアトリエ》 という自然と一体 化したような自宅兼事務所を設計しているが、その自 然観に大きな影響を与えたものに「風の谷のナウシカ」 (宮崎駿監督、1984年)を挙げる。人間とそれ以 外の生き物とが平等に共存できる世界を想像するうえ でこうした漫画やアニメがかなり大きな影響力を持って いると言える。地球規模で環境保全や生物の多様性 を訴えるときに、どこか抽象的なものではなく感性に訴 える切実な問題としてそれを把握できるものとして、こ うした表現は私たちの想像力を強く喚起する。

また、藤野が好む自然との一体感は、例えば詩人 であり建築家でもあった立原道造の以下の言葉を思 い出させる。詩人の感性に捉えられた建築とは、永 遠にあるものではなく消失されつつあるものであるかの ようである。

全体として特殊の趣ある自然美を構成し、建築が私た ちの作つたものであるか、自然の与へたものであるか を疑ふことすら忘れて、私たちがそれを眺める場合の あることから、私たちはこの問題を取上げた。これは 更に、建築が廃墟となり、もとの大自然のうちに半ば 還元されて、いはば消極的の意味で自然に溶けこむ 場合とも結びつけられて考へられるべきであろう| 4

ても自然環境への配慮は大きな問題となりつつある。 りひとつの風景を作り出している。塚本は「人びとの

反射する効果を使い、等価に映り込むような作品を制 を岡崎市で設計したEureka(40頁)の稲垣淳哉 は、東・東南アジアの集合住宅を数多く調査したこと 分離派論争が起きた大正時代には、前衛芸術家 がある。そこでは風の通り道を確保することが、空間 の隙間を生み出し、人々が心地よく集まれる場所が生 み出されていることを発見している。そして風の流れ や温度の変化、あるいは人が集う空間の生まれ方を もとに共同住宅を設計し、そこでは何気ない日常の触 れ合いから野菜の市場まで実施されるようになっている。 温暖湿潤な気候に棲まう私たちにとって自然との関わ りは、それを眺めるのでも管理するのでもなく、立原 が述べたように「溶けこむ」ようなものに感じられる。 自然の比喩を使って建築を語る代表的な日本の建 築家に藤本壮介 (82頁) がいる。彼は、「雲 | や 「森 | という言葉を多用し、自然が作り出す光やかたちを造 形表現に取り入れている。アーツ前橋から歩いてそう 遠くない場所にある藤本の初期の代表作《Thouse》 (2004年)では、シンプルで小さな住宅でありながら、 とても複雑で豊かな内部の空間を作り出している。部 屋を形づくる壁が一定の規則性を持たずに空間を区 切っていて、ひとつの空間の切れ日からまた次の切れ 目が連続しているように見え、わずか90㎡ほどの面積 なのにまさに森のごとく内部の襞を持っているように感 じられる。日本の現代建築家は素材としては木材、コ ンクリート、ガラスを多用し、色も白を基調としたモノク 「私たちの建築が往々、全く自然のうちに溶けこんで、 ロを好むため、描かれた線を建築として立ち上げるよう なデザインが多く見られる。藤本もまた線の建築家で

建築家が描く線は敷地を区切り、内と外を作り出す。 美術家が描く線は、自由な発想や戸惑いも含めて自 分自身の感覚を反映させる。アトリエ・ワン(28頁) の塚本由時が美術家の小沢剛と行った授業をもとに 出版した『線の演習』にはこの両者の出会いの軌跡 が記録されていて興味深い。とくに集団でパノラマ風 現在、地球温暖化の進展によって、住居におい 景を描く演習では、異なる特徴を持つ線が組み合わさ

あると言える。

意志が合っているかどうかわからないままつくられていく る山極満博(100頁)は、アーツ前橋の開館時に3 のが、風景だと思うんですしと述べているが、そこに は統一された意志を欠いていても人々が共存できる寛存在を意識させている。 容さが志向されているように感じられる。社会福祉法 人福祉楽団の依頼によってアトリエ・ワンが設計した 感覚におそらく裏打ちされている。

れが身体と結びついているからでもある。デジタル技 術によって描かれる線にはない特徴だが、新しい技 術を利用した膨大な記録の蓄積にも不規則で豊かな 細部が宿る。ライゾマティクス リサーチ (106頁)は、 さに、立原が感じ取った時間の経過のなかで壊れて 今和次郎が路上で実践した観察と記録を不可視の私 的空間で実現させようとする。すでに個人の私的領 域とウェブ上の公的領域が直結していることは私たち 消えてなくなるもの。それらは私たちが眼の前の現実 の日常の感覚に大きな影響を与えていると言われてい だけではなく、もっと複数の存在との関係性へと開か るが、センサーによってあらゆる室内の行動をデータ化 れていくきっかけを与えてくれるのではないだろうか。今、 することは圧倒的な量の情報蓄積を可能にする。そ れは不可視の領域を可視化させるだけでなく、さまざま な動作支援のための技術を開発するうえで有益であり、のか。かつては家族や地域の共同体を頼ればよかっ ビッグデータによるプライバシー保護と技術発展のせめ たが、安定した象徴秩序と切り離され私たちが個人 ぎ合いの最前線に置かれているプロジェクトだと言える。の自由な欲望を表出させて生きていく現代の社会にお

見えないもの、 消えゆくものへのまなざし

れらを実践する人間の存在自体はどのようにして、複 数化されるのだろうか。 忘れがちではあるが、かつて 分かれる。 異なる価値観の衝突を嫌がる人もいれば、 人間は動物や自然の生き物とともに生きてきた。かつ それを交換することに意味を見出す人もいる。三田村 ては、つねにその視線と気配を感じることができたし、 光土里(94頁)の〈アート&ブレックファスト〉プロジェ 伝統的な慣習にもそれは根付いていた。自分以外の クトは世界各地で、その十地の人と朝食を共にして、 誰かの存在を視線や風景のあり方として問い続けてい そこで入手できる材料によって作品の展示を行うもの

つの作品を設置し、そこにはいない、見えない誰かの

また、山梨県の小さな村で生活している木村崇人 (52頁)は、自分の身体感覚だけを頼りに自然と向 高齢者や障がい者の支援施設が、地域社会に溶け き合う。そのために、光、匂い、音、湿度、などさ 込み、周辺と密接な関係性を持っているのもそうした。まざまな自然との向き合い方を作品に反映させている。 小湊鐵道の月崎駅前に作られた 《森ラジオ ステーショ 描かれた線が不確かで豊かな起伏を持つのは、そ ン》(2014年)は、全体を苔で覆われた小屋で、天 井の光が床まで届き七色に輝いたり、森の中の音が ラジオから聴こえるなど、建物の内側に入るとその外 側の世界が感じられる不思議な場所だった。それはま いくことを前提とした建築とも言える。

> そこにはいない誰か、そして今ある姿ではなくやがて 地域社会において切実な問題としてあるのは、かつて ない高齢化である。私たちは死とどのように向き合う いて、家族のあり方や共同体のあり方もまた更新され るべきである。ツバメアーキテクツ(64頁)は、まさに こうした変化の兆しを反映した事例を調査し、これから の家族や疑似家族のあり方と、そのための居住の仕 方について考えている。

それまでの村落共同体を出た人々は世界中を移動 細部の拾い上げ、そしてしなやかにつながる線。そし、文化や宗教などの違いを超えた対話と交渉がはじ まった。移動する人と移動しない人。人は2種類に である。見知らぬ他人同士が、朝食という親密な時間を共に過ごすことで、一時的なものかもしれないが 普段の自分の肩書や役割から少し自由になる。これも また、単一の自己同一性から逃れることができる創造 的な力のひとつであるに違いない。

独特のタッチを持つ線で漫画とイラストを発表し、 小説家としても活躍する小林エリカ(58頁)は、自 分の家族と世界が直接的につながる物語を紡ぎ出 す。放射線をアントワーヌ・アンリ・ベクレルが発見し た1896年に明治三陸地震が発生し、その時に彼 女の曾祖母が3歳だったこと。個人の記憶は、世界 の喧しさとは無縁のようでいて実はそうではない。関係 ないと思われることが彼女の創造の力でしなやかにつ なぎ合わせられ、この世界の複数性を伝えてくれる。 今あるこの世界をひとつのものではなく、ありえたか もしれない別の姿によって想像すること。ここに棲むと いうことは、そのような想像力なしでは実に不自由であ る。私たちは消費者や市民として住まい方を選ぶばか りでなく、もっと自由に棲むということを想像することが できる。そのためにも、同時代の建築家と美術家た ちの技術と感性が、管理不可能な自然や死をどのよ うに私たちの個別の生と結びつけ、より豊かなものに する創造の力を発揮しているのか、しっかり見つめな ければならない。

 1 住友文彦「アーティストによるレッスン :芸術はどのように共同体と関わるのか」「あいちトリエンナーレ2013」 あいちトリエンナーレ実行委員会、2013年、225頁。
 2 野田伐彦が設計した「敷島浄水場構場事務所(現・前橋市水道資料館)」 (1924年)と中村鎮が設計した「橋林寺日本堂納骨堂(旧本堂)」(1932年)。
 3 倉数茂「私自身であろうとする衝動:関東大震災から大戦前夜における 芸術運動とコミュニティ」以文社、2011年、39頁。
 4 立原道造「方法論」「立原道造全集第四巻」角川書店、1972年、59頁。
 *81用に際し、旧漢字は新字体に変更し、旧仮名遣いについてはそのま まとしている。

 小沢剛・塚本由晴『線の演習:建築学生のための美術入門』 彰国社、2012 年、117 頁。

Imagination for Inhabitation SUMITOMO Fumihiko

If you live somewhere other than in the center of a large city with buildings on all sides, then you have probably thought about who lived on that piece of land before you, and imagined what kind of natural or geographic features it once had. In terms of the lifestyle they lead, many people would say that mundane factors such as family and work inevitably shape their lives, but we can also conceive that larger forces of happenstance are lurking within. When we acknowledge these forces, our workaday activities come to seem inseparably bound to the cyclical flow of time, to nature, the seasons, and memories of the dead who preceded us. However, our ability to imagine such a recycling society is undeniably ebbing under the scientific and educational systems of the modern state, and amid daily lives shaped by labor in a capitalist market economy.

In the short but beautiful novel The Big Wave (1947) by Nobel Prize for Literature laureate Pearl S. Buck, we can find an insightful account of the Japanese view of nature, life, and death as seen from a visitor's perspective. The author had lived for a time near the seaside in Japan, and was inspired to write the tale of a boy who had lost his family to a tsunami. In the final scene, the boy builds a new house on the shore with a window facing the sea, signifying that he has overcome the grief and fear that haunted him, but in the past I have criticized this scenario as overly rationalistic.¹ It seemed to indicate people shedding their dread and awe of nature: the now-grown boy is a symbol of humankind, in its wisdom and bravery, ruling over nature, when he boldly builds this house in a fishing village where no other houses' windows face the sea. In reality, I believe those who have long lived side by side with nature have a deep-rooted sense of both its fearsome power, and the need to face this power undaunted.

Disaster, Architecture, and Art

The positioning of windows on houses can illustrate relationships between people and the region they inhabit. Today, when we consider where and how we should live, we cannot avoid thinking about natural disasters, particularly since the two enormous earthquakes that struck in recent memory. On March 11. 2011, just when I was conducting an on-site survey for the final design of Arts Maebashi, I felt the earth move beneath my feet as I had never felt before. Afterward, the period when we were preparing to open the new museum coincided with electricity shortages. the lingering impact of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident, and ongoing discussions of what role art ought to play in society. For this reason, the museum building's retention of the structure from its previous incarnation as a commercial facility was deeply meaningful, in that it conveyed to visitors the continuity of time, linking past and present. In redesigning the building, architect Mizutani Toshihiro (p.88) elected not only to leave the exterior, familiar to local residents, largely unchanged, but also to make the subjective experience of the interior similar to that of the surrounding community.

When examining the predecessor building, one discovery we made was the large emergency staircase on the north side, which goes unnoticed by the majority of people. At that time Teruya Yuken (p.70) was in Maebashi as an artist in residence, and he spent the days after March 11 considering what he, as one artist, could do. He came up with a proposal for presenting the emergency staircase behind glass so it was visible to all, linking the ordinary with the extraordinary, tranguil day-to-day life with states of emergency. Not long after the disaster, on March 27, Teruya heard a benefit concert by the Gunma Symphony Orchestra, and he proposed creating a space where a recording of this concert would play every day at 2:00 and 4:00 PM. The proposal was realized when the museum opened in 2013, accompanied by a booklet expressing in words and pictures "the role of art and museums in an emergency situation."

The 2011 earthquake and tsunami destroyed countless homes, buildings, and entire communities, and in its aftermath a host of difficult issues faced architects, whose role it is to create these structures. The question of what kind of spaces we ought to inhabit is one fraught with both technical considerations and subjective sensitivity. Coincidentally, there are buildings in Maebashi²designed by both Noda Toshihiko and Nakamura Mamoru, two architects who in the early 20th century engaged in an intense debate over whether architecture should be considered an art. In 1920, soon after this controversy and not long

アトリエ・ワン+福祉楽団

Atelier Bow-Wow + Fukushi Gakudan



a祉楽団は、(恋する豚研究所)の周囲にある農家の荒れた林の手入れとして、間伐し、薪にすることを始 かた。きれいになった里山に引き寄せられるように、持ち山の整備や、薪の購入依頼がくるようになった。こう た経験から、研究所隣の休耕地に薪割小屋を整備し、障がい者や高齢者が、就労やリハビリなどで多目 りに協働利用できる仕組みと空間の実現を「就労移行支援」の枠組みで検討している。

アトリエ・ワンと福祉楽団は2010年から、《恋する豚研究所》《多古 新町ハウス》《1K》と3つのプロジェクトを協働で進めてきた。福祉 楽団は千葉県香取市を拠点に、地域に密着した福祉を実現するため に、人やモノなどの境界を取り払い、まちづくりの資源に変えていく取 り組みをしている社会福祉法人である。福祉の対象者を区分けしがち なこれまでの制度や施設設計のあり方に対して、だれもがそこに自然 にいられるような開放的な空間を模索している。こどもから高齢者まで、 障がいの有無にかかわらず、一緒に生活する豊かさと楽しさ、学び合 いを実現するための仕組みと空間のデザインである。(アトリエ・ワン)

Atelier Bow-Wow and Fukushi Gakudan collaborated on 3 projects for *Koisuru-Buta Laboratory, Takoshinmachi House*, and *1K*. In an effort to implement community-centered welfare, Fukushi Gakudan, a social welfare corporation based in Katori, Chiba, removes the boundaries between people and things and works to change these people and things into resources used for building communities. They are seeking to create open spaces for everyone, rather than institutions and facilities of the past that tend to set boundary to those on welfare. This is a design attempt to realize the framework and spaces which allow us to experience the richness, joy, and mutual learning from the living within the wider membership from people who need assistance and those who don't, both young and old. (Atelier Bow-Wow)

《1K》2014年-、千葉県香取市 *1K*, 2014-, Katori Chiba

乾久美子+ 東京藝術大学乾久美子研究室

INUI Kumiko + Tokyo University of the Arts Inui Lab

小さな風景のかたち

人はもっと自由に空間を使い倒して生きていくべきではないか。 そうした思いから、私たちはこれまで、人の物的な工夫に よって居場所が獲得されている現場を「小さな風景」と呼び、 調査してきました。生活者の空間に対するさりげない機転 が魅力的であること、また、その機転が周辺の環境と響き 合うような関係を構築していることを最大の価値としています。 事例は大小さまざま。公的セクターの施設もあれば、NPO や民間が運営するちょっとした居場所もあるというように運 営形態もバラバラです。本展覧会では、前橋市を中心とし た群馬県下で出会ったものも加えながら、小さな風景の実 践の様子に迫りました。(乾久美子)

The shapes of little spaces

Should people live by more freely utilizing space? With this thought, we examined and described cases where personal spaces were mastered through various physical plans up? until now. As the highest of values, we're pursuing the fact that a person's informal plans are appealing, and the building of relationships that blends those plans with the surrounding environment. If there are public institutions, then there are also small privately managed places, in many shapes and sizes. As such, there are various forms of management. For this exhibition, we want to gather research examples from Gunma Prefecture, centered on Maebashi city, and approach the even more complex and abundant circumstances of people's spaces. (INUI Kumiko)

(**IROBSON COFFEE** 7 -ツ前橋店」のドローイングができるまで》2015年 The drawing process of "ROBSON COFFE ARTS MAEBASHI", 2015



Stal Karon

M GALLAA

Irued































